みの頃のようすがよく歌われている。

また、知家は次のようによんでいる。

しらせはやけぶりを空にまがへても
霞の崎のあまのもしほ火

霞の崎で煙がいりみだれていても、漁師のたく藻塩火だけはよく見えるという歌であろう。霞の崎はもちろん霞ケ浦のことである。

「夫木和歌集」は延慶三年（一三一〇）ごろに成立した私撰和歌集で総数一七三五〇首、本県に関する歌が、三十数首ある。

平安時代末期の武将で、歌人としてもすぐれていた源頼政（一一〇四～一一八〇）が二首よんでいる。

秋さえる海上潟を見渡せば
霞に浮ぶ信太の浮島

秋になって空がさえている。海辺を眺めると、信太の浮島が霞の中に浮んで見える。霞というのは霞ケ浦のことを酒落ていったのであろう。

あまさかる海上潟を見渡せば
霞に浮かぶ信太の浮島

この歌も初句が違うだけで、同じ意味の歌である。源頼政は平等院で自害したが、その首が本県に運ばれたといわれている人物である。

夫木集には、後九条内大臣の歌もある。

さほ姫の塩焼くあまといつなりて
霞を浦の名にはたつらむ

てりもせず曇りもはてぬいさり火や
霞の浦のとまやなるらむ

春を掌る女神である佐保姫を霞ケ浦と結びつけて興味深い。

霞ケ浦の苫屋で漁火を焚いているのが「てりもせず曇りも果てぬ」と印象的に歌われている。

上西門院の歌は霞の浦の歌である。

散る花の霞の浦になみ寄るを
暮れゆく春のとまりとやみし

桜の花びらの散っている霞ケ浦を春のとまりと歌っている。非常に繊細なところまで見つめた歌で、春の霞ケ浦がよく描かれている。

また、夫木集には読み人知らずの歌もある。

はるかにも霞のさきを思ふかな
浪の花もや立まかふらん

はるかにもであるから、京からでもよんだのであろうかと思われる。

春のくる霞の里をいつしかと
垣根の梅も花咲きにけり